

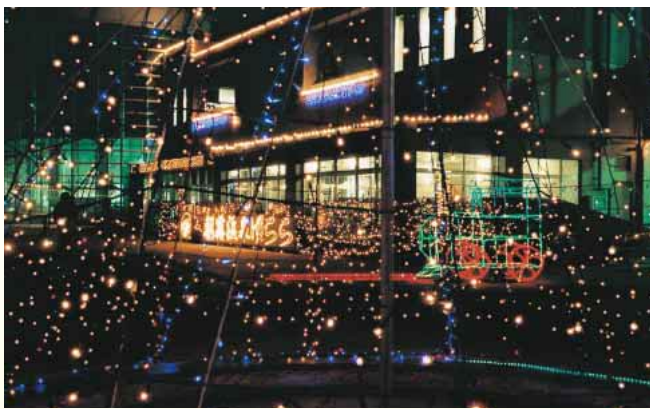
# GALLERY ギャラリー



「春」古布雛  
大椿 定子さん(松原町松岡)



「ケヤキのついたて」工芸  
植盛 勇助さん(有漢町有漢)



「メルヘンの世界」写真  
野口 繁男さん(津川町今津)



「雪」書道  
平松 剛介さん(成羽町佐々木)



「戌」押絵  
原田 テル子さん(成羽町下日名)



「今年の干支」押絵  
氏弘 澄恵さん(有漢町有漢)

1月号で上記作品の作者が入れかわっていました。お詫びして訂正します。

## 作品の募集について

- 【文芸】短歌、俳句、川柳など  
 【作品】絵画、工芸品、町の風景写真など  
 ●自作の未発表作品で、一人一作品とします。  
 ●ギャラリーの作品については、その写真をお送りください。  
 (撮影が困難な場合は、ご連絡ください)  
 ●住所・氏名・電話番号・作品の場合はタイトルを明記のうえ、お送りください。  
 ※締め切り掲載号の前日の末日(必着)

- 【送り先】〒716-8501(住所不要)  
 高梁市役所企画課公聴広報係  
 ※応募多数の場合は、紙面に掲載できない場合もありますので、あらかじめご了承ください。  
 ※提供いただいた写真等は返却できません。  
 ■問い合わせ 企画課公聴広報係 ☎0210  
 Eメール: kikaku@city.takahashi.okayama.jp

# 市民のページ

## 文芸たかはし

(敬称略)

### 短歌

北風の荒ぶがままの寒さかな春待ち侘る臘花の花

梅野 八郎(松山)

暖かい陽射しを浴びて大寒の一日くつろぐ夫ありてこそ

亀石恵美子(川上町仁賀)

田舎道福祉の車で迎えにて老婆笑顔でお願いと云う

下向 近雄(備中町平川)

修身と教育勅語に生きて来て世を憂いつつ迎ふ八十路の初春

平 初音(高倉町田井)

旧き良き友よりの予期せぬ賀状幾度も読みなつかしきかな

田中 弘子(川上町領家)

時期来れば冬芽の萌ゆる如月の大地の自然神秘を語る

原田 由き(高倉町飯部)

春蘭の葉に積りたる白雪のはかなく消ゆる命なりけり

榊上 秀雄(備中町西山)

少年の面影かすか同窓の岳寿の企てききと語りて

宮本 宮吉(川上町七地)

### 俳句

愚痴話笑って泣いた嫁子達

赤木 文子(備中町西山)

とんど焼き煙ゆらゆら里空へ

長原 茂子(備中町西油野)

寒ざむと病院通いの道つづく

平松 幾代(長寿園内)

宵月に細雪ふみいそぎけり

結城 成子(宇治町宇治)

今年はねかんしやしなから明るくと

吉岡 麻紀(鶴寿荘内)

### 川柳

回覧を届けてよればひと語り

藤井タツ子(備中町西山)

珍客が見えて炬燵で長話

中島 清市(成羽町吹屋出身)

## 地名をよるし

### 十六柳丁

成羽町に「柳丁」という町名があります。南の愛宕山(三七〇m)・鶴首山(三九二m)の北麓に位置し、成羽川の右岸、河成段丘上に出来た低地(氾濫原)にある町筋の一つであります。

「柳丁」のある下原一帯は、以前下原村でした。前期山崎氏初代の家治は元和三年(一六一七)因幡若桜から入部し、中世三村氏の築いた成羽城(成羽居館)に入り、のち家治が天草に移封され、寛永一六年(一六三九)には下館から水谷勝隆が五万石の成羽藩主として入封しています。勝隆は鶴首山や愛宕山の裾を流れていた成羽川の水路を北へ変えるという大工事(「大聖牛」)を行って河原地だった下原村に新陣屋を造営し、この陣屋を中心にした陣屋町の造営に取り掛かりました。が、わずか四年で松山藩主に転封となったため、陣屋町の建設は中断しました。

その後、万治元年(一六五八)家治の二男山崎豊治(後期山崎氏初代)が丸亀から入部し、水谷時代の陣屋を拡張して大規模な「御殿」を完成させ、御殿を中心に陣屋町の町割りを整備・拡張して新しい陣屋町の建設に努力しました。

町筋は武家町も町屋地区も、町の防備を考えた鍵型に折り曲げ見通しを悪くし、東の町屋は、町通り(大路)に交わる小路を設けた町割りになっていて、近世城下町(陣屋町)の特徴をもった「堅町型」の陣屋なのです。

「柳丁」は、本丁に続く武家町の一つで、給人格と中小姓が住む家中屋敷町でした。寛政元年(一七八九)頃の「成羽山崎氏陣屋町の配置図」(「成羽町史」)によると、本丁から「柳丁」への入口付近に町口番所が描かれ、角に坂田雪之丞の屋敷(門が復元されて残る)があつて川手側にほか八軒の屋敷と東の端に柳丁御門(番所)、南側(山手)には、一三軒(二軒不明)の屋敷が書かれています。

「柳丁」の通りには「道の中央に溝があつた。昭和の始めまで残っていた」(「成羽史話」といわれ、北の本町上



ノ丁大神宮の裏などの水路とつながっていて重要な用水だったのです。「柳丁」に住む武士たちは豊治が知行五千石の交代寄合格で、一万石未満の旗本でありながら参勤交代を義務づけられていたため、警護の侍として重要な役を受け持っていたのです。そして登城の際、江戸城中の殿席も帝鑑の間や雪に柳の絵が描かれた柳の間に通され大名に準ずる処遇を受けていたのです。

「柳丁」は昭和四十年代頃までは、最も陣屋町の姿を残す町筋だったのですが、今では門、屋敷の石垣、馬繫庭、煙出しの入母屋屋敷、土塀、蔵、そして武士の守護神・水郷の神の鹿島神社などに江戸時代の面影を残すのみになったのです。

「柳丁」という地名の由来については、いろんな説があります。一番多いのは①柳の木を植生によるもので、「柳丁」付近は河川敷で南端には溝や土手があつて風致上柳の木を植えていた。そして、この付近は小川が多くドジョウが捕れていた。江戸期新町の恵比寿祭りにはドジョウ汁をしていた(「成羽町成羽 細川寿美雄さんの話」)とあって、正に「柳とドジョウ」なのです。②堤や土手、斜面を意味し、屋根の「ヤナケ」・「ヤネ」から変化した。③参勤交代の時江戸詰で江戸城本丸の詰所の「柳の間」から「柳丁」の名を付けて武家町の格式を表わすもの(同)。

いづれにせよ①②③の地名説はいずれも関係がありそうで面白いのです。

(文・松前俊洋さん)



東から見た今の「柳丁」